

# 我はいかにして 途上国学徒となりしか

塩田 光喜

## ● 第一八話 一族

祖父定助の葬儀を終えると、祖母キクは遺識のとおりに五人の子供を連れて、詫間峠を越えて、仁尾の泰田の家へ帰ってきた。

さあ、大変である！

泰田の家はこうした事態を想定して建てられていない。曾祖父慶吾亡き後、曾祖母コヲ、息子の重明、末娘のマツノが三人で暮らしていた所に、いきなり六人の家族が転がり込んで来たのである。

だが、曾祖母コヲと嫡男重明は、この六人の扶養家族を快く引き受けた。

幸い、父正は翌年、三豊中学（現在の観音寺一高、以下三中と略す）に進学。大阪屋の二階の一〇畳敷きの部屋に移り、大阪屋で朝食を摂ると、自転車で観音寺に通学する。曾祖母コヲと大阪屋のヨッセさんの計らいである。

だが、その年、次男俊輔が疫病にかかると、祖父定助の時の手遅れに痛恨を残した一族は即座に阪大病院に送ることを決定。大阪屋の柴尾藤吉オジのT型フォードの助手席に俊輔を乗せ、後部座席には叔父重明が布団を丸めて座った。T型フォードは加嶺峠を越えて、詫間の駅へ（仁尾には鉄道が通っていない）。詫間の駅で、重明は俊輔を背負い布団を抱えると予讃線に飛び乗った。高松に着くと、大阪への船に乗船し、天保山の港に着く。そこからハイヤーを拾い、阪大病院へ。俊輔のベッドを確保すると、叔父重明は布団を敷いて、つきつきり

の看護をした。

この一族の素早い連携プレーによって、俊輔は一命を取り留めた。

塩田家は泰田と大阪屋に大きな恩を受けている。

祖母の連れて帰った息子達は、その後、順繰りに三中へ進むと、大阪屋のヨッセさんは居候に移って行くことになる。大阪屋のヨッセさんは祖父定助のことを非常に高く買っていて、「定助は賢い」と祖母に常に語っていた。そして、祖母の息子達のことを我が子のように可愛がってくれた。ヨッセさんの次女のマツ子さんは、よく「うちのお母さんは、自分の子より、塩田の子ばかり可愛がって」とよく恨み事を言っていたものだ。

祖母の連れて帰った五人の男の子は、曾祖母コヲの下にまとまっていた一族に育まれて幸せな少年時代を過ごしてゆく。

そして、祖母の五人の息子達と祖母の姉ヨッセさんの子供達は、イトコ以上、キョウダイ以下の交わりを結ぶ。

なかでも、父正とヨッセさんの長男の英一さんは無二の親友となった。

## ● 第一九話 族長コヲ

曾祖父慶吾と曾祖母コヲの嫡男、重明は男伊達の大好きな人だった。芝居で言えば幡随院長兵衛といった所だ。父慶吾の血を引い

ていたわけだ。だが、惜しむらくは慶吾の商売への打ち込みを欠いていた。

そこで、泰田の商売は曾祖母コヲの手腕にかかっている所となった。

コヲは女だから、慶吾のように船に乗って、イリコを集荷しては大阪へ捌きに行くわけにはいかない。そこで、商品をイリコから唐辛子に切り換えた。といっても、祖父定助のように、朝鮮半島まで買い付けに行くわけではない。仁尾や庄内半島のお百姓から買い付けるのである。

コヲの戦線縮小策は功を奏した。曾祖父慶吾や祖父定助のような大商いはできなかったが、泰田へのお百姓衆の信頼を元手に、商買は手堅く続いていたのだ。私の幼少時、昭和三〇年代にも、泰田の蔵は唐辛子の荷でいっぱい埋まっていた。

曾祖母コヲは、次第に息子の重明、娘のよし江とキク（私の祖母だ）とマツノ、そして、その子供達からなる一族の族長へと変じていった。

日本の一族は決して、画一的な父系出自集団ではない。一族は誰が族長になるかによってアメーバのように自在に姿を変える。曾祖父慶吾と祖父定助という二本の大黒柱を失った後、一族を束ねられるのは最長老で頭が抜群に切れ、しかも仁尾の人達誰もから一目置かれる威厳を備えていた曾祖母コヲだけだった。口数は少ないが、その言葉は誰もが領かざるを得ない理と迫力、説得力を持ち、その落ち窪んだ眼から発する炯炯たる光は会う人の心を射抜かずにはお

かなかった。

そして、コヲが族長になることで、我が一族は族長コヲの血を引く子孫から成る母系集団へと変じていったのだ！

そして族長コヲが心を砕いたのは何よりも自分の血を引くこの一族の平安と繁栄だった。一族の誰一人、不運な目に遭わないように差配すること。これが、曾祖母コヲの生涯かけた使命となった。息子の重明は男伊達が好きで、商売に身が入らないゴクドレ（祖母キクの言葉。標準語の極道に当たる）だったから、副官は長女のよし江（大阪屋に嫁ぎ、大阪屋を切り盛りしていた）になった。よし江（ヨッセさん）もまた、コヲに劣らぬシャープな頭脳を持ち、智慧深い賢婦だった。

こうして、曾祖母コヲのもとに再編された我が一族は、一九三七（昭和一二）年七月七日の盧溝橋事件に始まる日中戦争に突入した激動の時代の荒波に立ち向かっていった。

## ●第二〇話 父の青春

### ——六高時代——

父正は、三豊中学（現在の観音寺一高）でも抜群の成績を挙げた。とりわけ、数学と理科は無敵だった。本人も将来はキューリー夫人のようになりたいと祖母に打ち明けた。三中の校長も上の学校への進学を勧めた。

こうして、曾祖母コヲと祖母キクと大阪屋のヨッセさんの鳩首会議が行われた。

結論は、三中の校長の言うとおり、瀬戸内海の対岸にある岡山の第六高等学校（六高）を受験させること、であった。

戦前の旧制高校は超エリート校であり、そこに入ることは自動的に旧制帝大への入学資格を得るも同然であった。別けても、一高（東京）、三高（京都）など、数字で呼ばれるナンバー・スクールは超難関校であり、たとえば、熊本の高高は漱石が教授として赴き、そこでの経験をもとに傑作の『草枕』が書き上げられる。

父は六高に合格し、岡山に渡る。六高では、旧制高校の教養主義にドップリ浸ったようである。

まず、ヴァイオリン。後年、高校の数学教師を出しては、ギョギョコやっていたものだ。無論、一五過ぎて始めたヴァイオリンだから、大バッハのシャコンヌなどとても全く歯が立たない。だが、父の名誉のために述べておくと、セザール・フランクのヴァイオリン奏鳴曲（昔はそう呼んだ。このロマンティズムの極地のような曲には、ソナタというテクニカルな呼び名より「奏鳴曲」の方がはるかにふさわしい）の第一楽章くらいは弾けたのではないかと思う。ヴァイオリンはストラディヴァリやゲアルネリのような名器は勿論、天文学的お値段だが、入門者用の安物でも、当今、一〇〇万円はする。昭和一五年当時も決してお安くはなかったはずだ。祖父定助の遺産があったとは言え、他に四人の男の子を抱えていた祖母が買いつけたとは思えない。おそらく、父を溺愛していた

族長コヲと大阪屋の父の伯母ヨッセさんがお金を出してくれたのだと思う。

次に油絵。晩年まで父の趣味だった。父のレパートリーは人物画である。晩年、描いていたのは女優の沢口靖子や妹の絵であった。「これを日展に出そうと思とんじや。一〇〇万で売れたら小遣いになるしいう」と言っていたが、私が見た所、ていねいにきれいに描かれてはいるが、父にしか描けない独自の切り口に欠けているように思えた。ザックリ言ってしまうと、上野公園の似顔絵の高級版と言った所だ。

そして、日本浪漫主義。父は生前、このことについては口を閉ざしていたが、私が大学へ入って長期休暇に仁尾の泰田の蔵をゴソゴソやっていると、父の署名のある保田與重郎や亀井勝一郎の本がゴソソリ出てきたのだ。

父は頭脳は理数系だが、ハートはロマン主義だったのである。

最後に柔道。父が脳梗塞で倒れ、昏睡状態の病室に駆けつけると、父は拳を固めて両腕を上方に突き上げていた。その時は何をしているのかさっぱりわからなかったが、今思うと柔道の襟を取っていたのだ。それくらい父は柔道に打ち込んでいた。晩年、よく口にしていたのは、「六高時代、柔道に夢中になりすぎたのう」という悔いであった。

父は希望していた東京帝大や京都帝大ではなく、九州帝大の物理学科に割り振られることになる。

## ● 第二一話 一族と戦争

祖母の弟、泰田重明は、祖母の連れ帰った五人の甥達から「おっちゃん」と呼ばれた。この呼称はやがて一族に広まり、さすがに曾祖母コヲは「重明」と呼んだが、姉の祖母キクですら弟のことを「おっちゃん」と呼んでいた。さらに、仁尾の町の人達までが「おっちゃん」または「泰田のおっちゃん」と呼ぶようになったのだ。そこで、私も大叔父重明を「おっちゃん」と呼ぶことにしよう。

日本が日中戦争に突入した当時、曾祖母コヲを族長とする我が一族の中で兵役年齢に当たっていたのは、おっちゃんただ一人だった。

召集令状が届き、兵役検査を受けたおっちゃんは父譲りの短軀瘦身であったため、兵士ではなく輜重輸卒として採られた。今では耳にすることのない言葉だが、要するに、前線で戦う兵士達の武器や食糧などを補給するロジスティック（兵站）の任にあてられたのである。

おっちゃんは、北支（北中国）の曠野を輜重を運んで移動していたらしい。

「輜重輸卒が兵隊なれば、蝶ちよ、とんぼも鳥のうち」と言っていて、祖母はよく笑っていたが、これが幸いだったのだ。おっちゃんは兵役期間中、前線の背後で銃を撃つことなく、過ごすことができた。おかげで大陸から無事、帰還できたのだ。

だが、それでも病的なまでの潔癖症（一族ではカンシヨ病みと呼んでいた）だったおっちゃん

んには、軍隊生活は決して楽なものではなかった。ある時、おっちゃんのカンシヨ病みにホトホトあきれかえった祖母が、「おっちゃんよ。うち帰ったらアルコールで手拭け、足拭け言うけど、軍隊で便所掃除はどうしよったんや？」とたずねると「晩飯を他の兵隊にくれてやって、代わりに掃除させたわ」と答えたものだ。病膏（やまごう）旨とはこのこと。おっちゃんの不潔嫌いはここまで徹底していた。

そして、一九四一年二月八日、日米が開戦する。

父とヨッセさんの長男の英一さんは一六才である。徴兵年齢は刻々と近付きつつあった。だが、父は九州帝大物理学科に進学。素粒子物理学Ⅱ核物理学を専攻する父は、徴兵免除を受ける。「兵隊となるより武器を開発してお国のお役に立て」というわけだ。

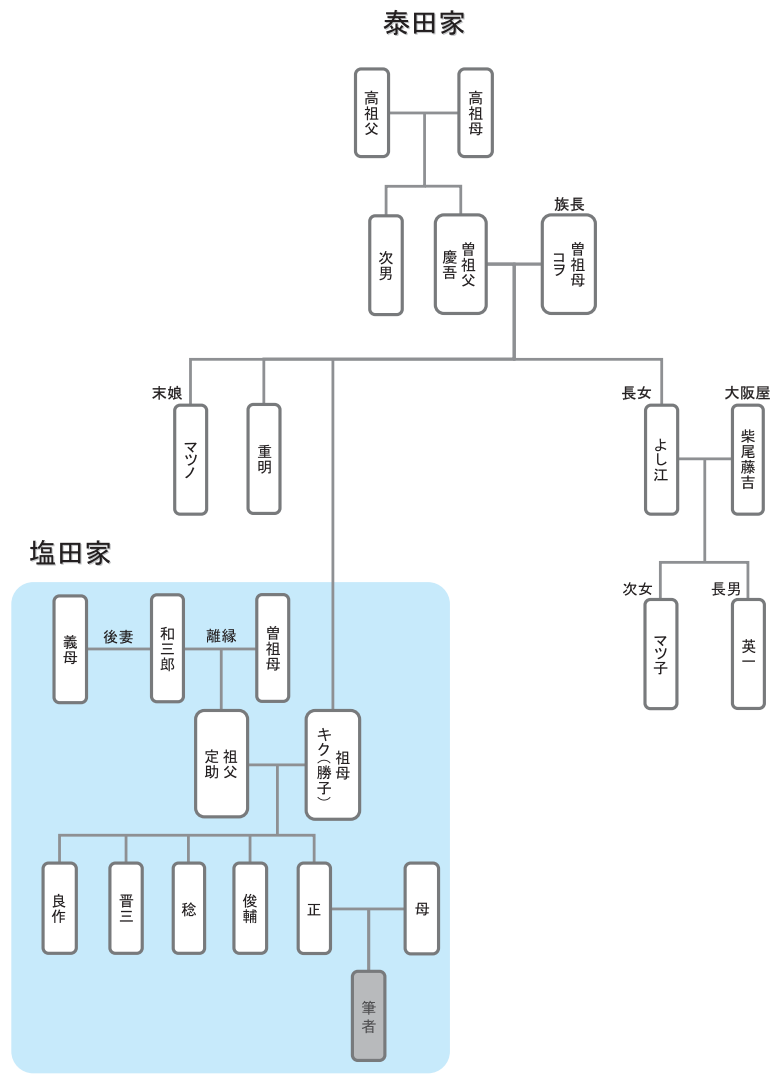
してやったり！祖母キクと父を溺愛する曾祖母コヲは手を取り合って喜んだ。

この時の経験から祖母キクは私にも理数系へ進めたがった。国語や社会で高得点を取っても、数学や理科のできが平凡なら駄目！とにかく、数学・理科で高得点を取れの一言だ。

父のイトコの英一さんは商業学校へ進んだので、召集を受けて、祖母の言葉によれば「揚子江のほとりで鉄砲のカスになった」。

同い年のイトコで無二の親友だった父とイトコの英一さんの運命を分けたのは、二人の資質の違いだった。私はこのことに人間の生における運の重みを感じずにはいられない。

おことわり  
 当連載の筆者、塩田光喜主任研究員（アジア経済研究所貧困削減・社会開発研究グループ）は、去る二月一九日に急逝いたしました。残念ながら連載を中止することになりました。生前、執筆していただいた第二話までの四話を、ここにまとめて掲載いたします。これまでの皆様のご愛読に感謝いたします。



しおた みつき／アジア経済研究所 開発研究センター 貧困削減・社会開発研究グループ主任研究員

専門分野 文化人類学、地域研究（太平洋諸島）

略歴

- 1979年3月 東京大学教養学科文化人類学課程卒
- 1979年4月 アジア経済研究所調査研究部入所
- 1985年1月～1987年4月 海外派遣員としてパプアニューギニアへ派遣
- 2003年3月～2005年3月 海外調査員としてオーストラリアへ派遣
- 2014年2月没

主な著作

- ・塩田光喜編著『知の大洋へ、大洋の知へ！—太平洋島嶼国の近代と知的ビックバン—』彩流社 2010
- ・塩田光喜著『石斧と十字架 パプアニューギニア・インボング年代記』彩流社 2006
- ・「崩壊の予兆—パプアニューギニア議会制民主主義の人類学的分析—」『アジア経済』2003
- ・塩田光喜編『島々と階級—太平洋島嶼諸国における近代と不平等—』アジア経済研究所 2002
- ・塩田光喜・熊谷圭知編『都市の誕生—太平洋島嶼諸国の都市化と社会変容—』アジア経済研究所 2000
- ・塩田光喜編『海洋島嶼国家の原像と変貌』アジア経済研究所 1997
- ・塩田光喜・熊谷圭知編『マタンギ・パシフィカー太平洋島嶼諸国の政治・社会変動—』アジア経済研究所 1994
- ・塩田光喜著『太平洋文明航海記—キャプテン・クックから米中の制海権をめぐる争いまで』明石書店 2014